

なぞに入れて置きませう、他の知らない場所へ隠して、飽まで知らない顔するの  
が當然ではございませんか、それを皆様の前で落ちたのも知らず、又落ちるやう  
な袂に在つたといふのは、私が取つたのでなく、何かの間違で、知らない間に入  
つてゐた、何よりの證據だと存じますわ。』

言ひ了つて涙を拂つた。夏子の傍で牛乳を飲んでゐた文子は、深雪の泣顔を妙な顔  
して眺めてゐた。お角は毒々しく、

「深雪さん那樣白々しい辯疏するより露顯した上は、深く自白して了つた方がお前  
さんの利益ですよ。」と自白を追つた。

「ですけれども、私取つた覺もなければ、袂に入れた覺も無いんですから、自白の  
致やうが無いちやありませんか。」

お角は以前が賤業婦であつただけに、良家の未亡人であるといふ、今日の身の上も  
顧みず、野卑の性格を暴露して、

「盗人猛々しいとお前さんの事だよ、人が優しく言へば宜い事にして、取つた覺  
がないも能く言へるわ、いくら開けた世の中だつて、床の下に入れて置いたお紙  
幣が獨でお前さんの袂に入りますか、餘り他を莫迦にするものぢやありません、  
飽まで知らないとお言ひなら、知らないにも致やうけれど、それならば何故お前  
さんの袂に入つて居つたのか、その辯解を判然となさい、若し辯解が出来なけれ  
ば、幽吉が不在中でも、この儘には赦しませんよ。」

追窮した。幽吉が不在中でもこの儘赦さないと云ふ辭は、解剖的に味つて見れば、  
離縁を意味して居るから、深雪の駭きは非常なもので、如何にしても身の潔白を證  
據立てやうと、辯解の辭を考へるのであつたが、殘念ながら濡衣を乾すに足るだけ  
の反證が見出されない爲に、又も無言のまゝ首低れて了つた。

深雪の災難を、先刻から我身の事のやうに、心配してゐた夏子は、事の形勢を容易  
ならずと見て取つたので、

「母様、そのお紙幣を包んであつた紙を、私に些と見せて頂戴な。」  
突如に言ひ出した。お角は又要らぬ口出しするかと言ひたげに、閃りと凄い睨みを浴びせて、無言のまゝ、包紙を渡した。夏子はその紙を取上げて凝と眺めて居つたが、忽ち驚き顔に、

「母様も姉様も、何うか堪忍して頂戴な、これは皆な私が悪いんです、私が早く思ひ出せば宜かつたのですけれど、豈夫お金子が入つてゐるとは思はず、唯の紙片位に考へてゐたものですから、唯今漸と思ひ出したんですが、そのお金子は決して姉様が何う憐うなすつたのではなく、先刻私が代つて御介抱しやうと思つて、母様のお傍へ往つた時、お床の下から出て居たものですから、屹度姉様の袂から出たものたと思つて、密と入れて置いたんです。それが計らずもお金子が入つてゐて、こんな間違が起つたのは、皆な私の不行届から起りましたので、母様の仰やるも有理なら、姉様の知らないと仰やるも有理、結局罪は私の不行届にあるん

ですから、私が貴女方お二人様へ、お詫び致しますから、どうか御寛辨なすつて下さいね。」

と謝罪した。深雪は身の潔白を證據立てられたので、天に昇る嬉しさを覺えて、覺えず嬉涙を零した。お角はと見れば、巧に工んだ悪計の裏を掻かれたので、凄い眼をしてぶりぶり怒りながら、

「それならそれと、何故早く言はないんです、お前さんが早く言ひさへすれば、お互に嫌な事を言ひ合はなくして済むのちやありませんか、散々言ひ合つた今となつて、那樣曖昧な事を言ひ出すなんて、何といふ氣の利かない人だらう、例も言はないで宜い事まで言ふ癖に……」

口汚なく罵るやうに言つた。夏子は負けてゐず。

「だから、私が行届ないとお詫申してちやありませんか、母様のやうな萬事に行届いた方は、這般失策なさらないでせうけれど、私は茫乎ですから、眞箇忘れて

居ましたわ、どうか悪からず御勘辨下さいまし。」と再び詫言た。

お角は胸を掻むしるほど腹が立つて堪まらないので、任意になるものなら、打懲しても遣りたいのであるが、生さぬ仲の親子とてそれもならず、鋭い眼を睜つて、

「深雪さん、お聞きの通り、夏子さんが、お前さんのだと思つて、黙つて入れて置いたんださうなから、氣持を悪くしないで下さい、事の行違から起つた災難だからね。」

「私の潔白さへ分りましたら、それで満足でございませう、どうかこの後は金庫へでもお入れなすつて置いて下さいまし。」

夏子は漸くにして案へ出した苦策が功を奏して、首尾克く深雪の災難を救ふ事を得たので、心に凱歌を謳うて歡んだ。如何成り行く事かと、沈黙を守つて形勢を傍観してゐたお鶴は、何とは無しに深い太息を洩らした。深雪はと見れば、夏子の厚意を神の救いのやう、心の底から深く、感謝したて居る様子が見えた。

ところへ女中がアイスクリームを持つて來た。

「直に電話をかけましたのに、漸と唯今持つて参りましたんですよ、遅く成つて相済みませんでございませう。」

事由を述べて立去つた。

「お鶴さん、漸と参りましたわ、さあ召上つて頂戴な。」

と夏子が勧めた。

「頂戴致しますわ、どうも有難う……」

「母様は如何です、お頭痛がお宜しいやうですから、一つ召上らない。」

と勧めた。お角は不興顔して、

「私に管はず、お前さん方お上りなさい。」

と愛想もなく答へた。先刻から睡氣を催ふしてゐた文子は、堪へられなくなつて、憤り出した。これを好機として、深雪は膝に抱き上げると共に、

「又憤りかけましたから私はこれで失禮さして頂きます、どうぞ御免下さいまし。」とお角を始め一同へ挨拶して去つた、お角は返辭も致なければ見向も致なかつた。同時に時計が十一時を告げた。

「おやッもう十一時だわ私もこれで失禮致します、お鶴さん澤山に召上つて頂戴な。」と夏子が挨拶した。

「あらッ、こんなにも澤山何うして頂けるものですか、貴女も召上つてお寝みなさいよ、いくら時計が十一時を打つたからつて、五分や十分管はないぢやありませんか。」

お鶴が勧めた。

「例も十時には必ず寝む事に極めてるんですけれど、今夜は母様が御不快な爲に遅くなりましたのよ、お悪ければですけど、快い御様子ですから、相済みませんけれどお先へ失禮致しますわ。」

と更にお角に向つて、

「お鶴さんが居らして下さるから、お願い申して失禮致しますわ、どうぞ御大切になすつて頂戴な。」

と挨拶して、匆々に立去つて了つた。お角は相變らず無言のまゝ、忌々しさうな顔をして、後姿を見送つてゐた。

「叔母さん、一体何うしたの、何が何だか事情が分らないぢやありませんか。」

お鶴が小さい聲で問ねた。

「彼の餓鬼は何といふ嫌な餓鬼だらう、口を出さなくつても宜い所へ口を出して、折角企畫んだ私の仕事を到頭突き崩して了つたよ、あれさへ黙つて居れば、窃盗の悪名を付けて、離縁して了つたものを、忌々しい奴ぢやないかね。」

と低い聲で告げた。

「それでは眞箇深雪さんが盗つたのぢやなかつたんですか。」

不審さうに問ねた。

「お前さんの希望が叶へて遣りたいばかりに、離縁の口實を作る爲に、私が密と袂へ入れて置いたんだよ。」

「それを何うして夏子さんが、御自分が入れたなぞと言ひ出したんでせう、可怪いぢやありませんか。」

「何有二人は仲好だから、深雪が苦しいのを見て、跡方もない事を作り出して、救けたんだよ。」

「まあ、年齢の行かないのに、なか／＼ですわ……」

「結局私の企畫の裏を掻いたんだよ、假病まで作つて仕組んだ悪計を、あんな年端も行かない小娘に、突崩されたと思ふと、胸がむか／＼して来るわ。」  
と残念さうに言つた。

一六 感謝

お角の部屋を出た夏子は、己が部屋へも入らず、密やかに深雪の部屋に入つた。深雪は文子へ添乳しつゝ、今宵の災難を、夢の跡でも逐ふ如く、左や右と考へてゐる折柄であつた。夏子は睡りかけてゐる文子の夢を駭かさぬやう、靜に傍へ寄つた。そうして四邊を憚る忍び聲で、

「……姉様、とんだ災難でしたわね、一体何うしたんでせう。」  
と問ひかけた。

「夏子さん、有難うよ……貴女の御親切終生忘れないわ、とんだ目に遣はされるところを、眞箇貴女の爲に脱れましてよ……私今も種々と考へてゐたのですが、何うしてあの紙包が私の袂へ入つてゐたのか、不思議で堪まらないんです、全ツきし覺か無いんですからね。」

文子を願みつゝ、低聲で答へた。そして静に軀を起したが、文子の覺める氣勢が無いのを見定めて、漸く安心の色が見えた。

「だつて姉様、母様のお辭ぢやないけれど、床の下に入れてあつたものが、羽が生えた理ちやあるまいし、獨で入る道理が無いぢやありませんか。」

「ですから、尙更不思議で耐らないんです。」

「私大抵想像が就いてよ。」

「何うしたのだと思つて下さるの！」

「彼人の策略よ。」囁くやうに言つた。

「私も然う考へて見ましたけれど、しかし那麼にまでして、私をお苛めになる理由がないと思ひますが、何か深いお怨みでも受けてるんでせうかね。」

「先日來の様子を見ると、何かしらお氣に召さない事があるに相違無いと思ふわ、それだけでなく彼麼にも酷い事仰やる理が無いぢやありませんか、だから屹度あゝ

言ふ悪い工をして、腹の癒えるほど苛める量見だつたのよ。」

「すると何時の間にか、私の袂へお入れなすつたんでせうか。」

「屹度然うよ、姉様が夢中になつて御介抱してゐらした時、隙を見て密と入れたんだわ、それでなくて入つてゐる道理が無いぢやありませんか。」

「然う聞いて考へると、寢返りなすつた時、袂にお手が觸つたやうに思つたが、その時入れられたかも知れませぬね。」

「それでは屹度その時だわ。」

「何といふ怖ろしい方でせう、考へても身の毛が彌立ちますわ。」

「眞箇お氣をお注けなさらないと、どんな濡衣被せられるか知れないわ、先刻でもあの儘汚名を被せられて御覽なさい、どんな事言ひ出されても、此方に弱點のある以上、残念でも、それに従はなければならぬ事に成るでせう、だから私どうかして疑ひを晴らして上げやうと、随分苦心したけれども、これといふ反證が無

いものですから、辛と思ひ付いて、何うにか誤魔化すは誤魔化したけれども、言ひ出す時機を通り越してゐたから、怪しく思はれたに極つてゐるけれど、救けさへすれば宜いと思つて、前後の考へもなく、夢中で言つて了つたわ、何を言ひ出すかと、心配なすつたでせうね。』

「九死一生の場合だつたから、眞箇心で拜んでゐましたわ、取つたといふ證據は、現在私の袂から出たんだから、争はれの證據ですけれど、取らないといふ反證は何一つ無いんですからね、どう辯解して疑ひを晴らさうかと、生きた空はなかつたです、若あのまゝ辯解が出来なかつたら、盗みをする嫁は置かれなと言つて離縁の宣告なさつたかも知れないわ……」

「私それを心配したから、それで苦策を思ひ付きましたのよ、あの様子では何を言ひ出されるか、眞箇知れないんですもの、兄様の御不在中に、そんな騒ぎでもあらうものなら、申譯がありませんからね。』

とばかり思へない節があると思ひます、普通の缺點や、不行届を咎め立たざるのなら、それは私に非があるのですから、寧ろ有難くお小言を受けますけれど、殊更に苛責の材料をお作りなすつて、お苛めなさるといふは、世間に入り觸れた嫁姑の確執と見る事は出来ないと考へます、それもです、害悪にならない材料をお作りなさるのなら、まだしも我慢も辛抱も出来ませんが、苟めにも物を盗み取つたと仰やるんですもの、若しあのまゝ、嫌疑を解く術がなくて私の所業と極つて御覽なさい、設令離縁の宣告を受けないとしても、何うして阿容々々居られるものですか、一身の處決を致なければならぬでせう、して見れば、私の身に取つては、一生の死活に關する大事件ですわ、然ういふ悪工までなすつて、お苛めなさるのには、何か原因がなくてはならないと思ひますが、何が原因であんな怖ろしい企畫をなさるんでせう、私、何うかしてその原因が知りたいと思ふのですが、いくら考へて見ても、想像が就かないんです。』

「貴女が居て下さらなければ、私とても辛抱出来ないことよ、兄様さへお歸りになれば、母様の御機嫌も好くなるでせうから、どうか今暫く力に成つて頂戴ね、この御恩は決して忘れは致しませんわ。」

深雪が心からなる信頼を表白した。

「お互に盡し合ふのは當然ぢやありませんか、私だつて何時姉様の御厄介になるか知れないから、私の力の及ぶだけは盡しますから、安心して居らつしやいな。」

夏子が赤心を罩めて答へた。深雪はその辭を沁々感謝して、何とはなく心強く思ふのであつた。爲に沈み切つた顔に、やゝ安心の色が閃いたが、忽ち又不安の色を浮べて、

「真箇貴女一人を便にして居ますけれど、しかし何う考へて見ても、合點の行かないのは、母様の態度ですわ、何が爲に私を敵のやうにお苛めなさるんでせう、今夜のなされ方から考へて見ると、單に嫁奇めをして、御自分の權威を満足なさる

胸一つに餘る思案を別つべく語つた。

「私も今夜までは、普通有勝なお小言で、父様が居らつしやらなくなつたものだから、これまで姉様に對して、抑へて居らした、姑の不平が一時に出て來たとばかり思つて居ましたけれど、今夜の企計から考へると、何か深い原因があると思ふ……ですから若し我々の想像通りだとすれば、この後まだ甚難題を仰やらないとは言へないから、病氣とでも仰しやつて、暫時別荘へ往らしつては如何！兄様さへ歸つて入來しやれば、母様の考へも變るでせうし、變らないにしたらが、兄様といふ相談柱があるんですから、少しも心配ありませんから、何れにしても兄様の御歸朝までの御辛抱ですわ、三ヶ月ばかり別居する考へで往らつしやいよ。」

「だつて母様のお許しが出なければ、勝手に參る事出来ないぢやありませんか。」

「ですから猿田先生へ内情を打明けて、お願ひすれば宜いぢやありませんか、主治



醫が別荘へ往つて保養せよと勸めて下されば、母様だつて、それを拒む事出来な  
いわ、若し嫌な事でも仰やれば私が應援してよ。」  
「それにしても、無病健全で御診察願ふ病氣が無いんですからね。」  
「何とでも病氣作れば宜いぢやありませんか、何うせ内情を打明けてお願ひするん  
ですもの……。」

「それでは脚氣とでも言つて診察願ひませうかね。」

「それ／＼それが宜いわ、脚氣だと轉地療養に限るんですからね。」

「では然う致ませうね。」

言ふ時、室外で衣摺の音が聞えたので、二人は口を噤んで了つた。

### 一七 非常手段

お角は苦心して考へ出した悪謀が、水泡に歸して了つたので、口惜いのと忌々しい

のとで、神経が昂つて睡られない爲に、終宵第二の悪計に腐心するのであつた。

「屹度二人が何事か相談するに相違ないと思つたから、密と深雪の部屋を覗いて見  
ると、案に違はず夏子の邪魔者が來てゐて、密な話をして居たけれども、敵もさ  
る者だ、囁き話をしてゐたから、何を話して居たのだから、要領は聞えなかつたけ  
れど、何でも別荘へ往けといふ聲だけが耳へ入つたが、今夜の事に懲りて逃げ出  
す心算か知ら……別荘へ往くにしても、私に無断で往く筈はないから、若し言ひ  
出したら許して遣らないばかりでなく、それを口實に又一苛め苛めて遣るまでの  
事だ……しかし慙う心が割れて了つては、彼等の方でも、それ相應に覺悟するに  
相違無いから、この際何でも彼でも難癖を付けて、離縁して了はなければ、いく  
ら遺言狀に認めてあるからと言つて、幽吉が歸つて來た上は、遺言を守るか何う  
か知れないからね……何ういふ方法を取つたら宜いか知ら……窃盜の悪名を付け  
たら、一も二もなく離縁して了はれると思つて、樂んでゐたのに、とんだ奴に邪

魔されて了つたし、餘程の重大事件でなくちや、幽吉の留守中に離縁する理には行かないし、噫困つたね……何か一言半句も文句の言へない、離縁の口實は無いか知ら……」

と熟と眼を閉ちて考へるのであつた。夜は森々と更けて、枕時計の秒を刻む音と、傍に寝んでゐる、お鶴の呼吸のみ高く聞える。やゝ寸時思案に耽つた後、漸く何事か思ひ浮べたやう、獨り微笑んで、

「考へて見なければならぬものだね、我ながら名案が浮んだと思ふわ、もうこれより外に、離縁を言ひ渡すだけの口實はないと思ふね、しかしこれを實行するに就いては、私一人では役者が足りないから、早速明朝山浦へ往つて、狂言の相談する事に致やう、山浦の手には、大村といふ打つつけの役者が居るんだからね、そうして一日も早く離縁して了はなければ、山浦との約束を果すことが出来ないからね。」

かく決心すると共に初更からの疲勞が一時に襲ひ来て、ぐっすりと睡つて了つた。そうして眼の醒めたのは、もう窓に旭が射して居る時であつた。お鶴はと傍を見れば、これもまた前後も知らず熟睡してゐた。

「お鶴や、お鶴……お鶴さん……もう旭が上つて居らつしやるよ、私もすつかり疲れたと見えて、辛と目が醒めました、もう起きやうぢやないか。」

と辭をかけた。お鶴は欠伸を咬締めながら、

「私も能く寝ましたわ、いつ夜が明けたか、少しも知らなかつたんですよ、もう餘程遅いでせうか。」

言ふ時、枕時計が八時を打つた。

「おや八時だわ、何うしませう、這麼に朝寝坊して極が悪いわ。」

とお鶴が起上つた、お角は朱羅宇の長煙草で寝ながら蓑を輪に吹いて、

「誰に遠慮があるものかね、お前さんの家だと思つて大きく成つてゐるが可いわ。」

私か憚うしてゐる以上、誰が何と言ふものかね。』  
誇るやうに言つた。

『でも起きませうよ、勤める人はもう勤めに出てゐる時だわ。』  
するとお角は俄に思ひ出したやう、

『然う〜私も今朝は、何でも彼でもお前さんの家へ往かなければならぬ用向があるんですよ、久五郎が出かけると困るから、起きて出かせう。』

『それでは、御一緒に歸りますわ。』

『直に御飯を食べて出かせう。』

起き出で、食事を済まし、衣類など更めた後、お鶴と共に山浦の宅を訪ふべく出て往つた。

お角が山浦を訪ふた時は、既に山浦は會社へ出勤した後であつたから、直に電話をかけて、大村と俱に歸宅するやう促した。お角と密接の關係を有する兩人は、倉皇

打連れて歸宅した。そうして山浦は先づ大村をお角へ紹介した後、共に與に二階の一室へ入つた。故と四方の建具を開放して、三人鼎坐に着席したが、先づ山浦が聲を密めて、

『何ういふお話があるんです、無論例の一件に就いていせうな。』

と問ひかけた。お角は大村の顔を、氣遣はしさうに眺めつゝ、

『然うですよ、彼の一件に就いてはすが、しかし遺言状の方は、幽吉が歸つた上でなくちや、何うする事も出来ないから、彼の歸朝を待つ外はありませんけれど、今日御相談が致したのは深雪の一件ですよ、實はお約束して以來、今日に至る

まで、何につけ彼につけ、随分意地悪く苛めて扱いましたが、何しろ小供もある事だし、歸らうと言つて歸る家もない身の上だから、甚だ無理難題も辛抱して

自分の方から身を退くやうな様子無いものだから、到頭昨日は退引ならぬ難題を考へ出して、それを實行したところが、旨く目的通り行きましてね、もう離縁

を宣告するばかりに成つてゐたのですけれど、幽吉の妹が邪魔をして、折角の苦心を突崩されて了つたものだから、私一人の思案では、到底遣り切れなくなつたのです。それに幽吉の歸朝期が早くなつたものですから、何でも彼でも、歸朝以前に離縁して了はなければ、歸つてからは遺言状に認めてあつても、好で貰つた妻だから、離縁致ないかも知れないから、それこれでお前さん方と相談して、少し手傳つて貰ひたいと思つて、それが爲に故々來たんですよ。』

委細を物語つた。

『それは色々御苦勞かけてお氣の毒でしたね、私共で間に合ふ事なら、甚麽お手傳ひでも致しますが、何か好いお考へがあるんですか。』と山浦が問ひかけた。

大村は春廣服を着て、窮屈さうに坐つたまゝ、お角の顔を眺めて、熱心に聞いて居つた。

『今日までに、有ゆる方法を考へて、苛められる限り苛めて、愈も百計盡きて了

ひましたから、這度は一つお前さん方の應援を願つて、一言半句も苦障の言へない狂言を仕組んで、その場で離縁して了ふ決心なんですが、それには何うあつても大村さんの手を借なければ、芝居が打てないものだから、一度お目に懸つて、應援が願へるか何うか御意見を承はつた上で、私の思ひ付をお話致やうと思つてゐるのです。』

言ひ了つて、大村の心を讀むがやうに顔を見上げた。大村は髭を弄りながら、

『彼人と私との關係に就いては、山浦さんからお聞及びの通りですから、どんな應援でも致しますが、一体何ういふ手段をお採りになるお考へですか?』

お角は四方をぐるりと見廻した後、

『それは恠ういふ狂言を仕組んだのです。』

と他には聞えぬほどの聲で、頭を突合すやうにして囁くのであつた。やゝ暫くすると、山浦は夢から覺めた人のやうに、眼をどんよりとさせて、

「なるほど申分のない狂言の仕組みだが、しかし大村君が立役者だから、君が手腕を揮はないと好結果は得られない理だね、歌舞伎で役を振れば、八百藏といふ役所だからね。」  
と大村の顔を見た。

「餘り好い役ぢやないけれども、引受けなければ、目的が遂げられないから、憎まれるのを承知で引受けますよ。」

「相談が極つた上は、私から何時何日といふ事は、前以てお知らせします。」  
「何うか然ういふ事にお願ひ致します。」

一八 快諾

窃盗の汚名を被せられんとしてから三日目の午後二時頃であつた。深雪は夏子の勸告を實行すべく心に期して、先づ姑の允を受けやうと、お角をその部屋へ訪れた。

お角は例になく笑顔に迎へた。深雪は氣味悪く感じながら、

「母様、私昨日から俄に兩脚が痺れて室内を歩きますにも、感覺がなくて困りますから、一度猿田先生に御診察が願ひたいと存じますが、如何でございませう？」  
と問ひ試みた。

「それは意外事ですね、俗に謂ふ痺脚氣かも知れないから、早速に御診察願ふが宜ござんす。」

快よく許諾を與へた。

「それでは何うか暫時お暇を頂きます、此方へお越を願ふと申してもお氣の毒ですから、電話で御都合を問合せまして、私が一寸参る事に致します。」

「お越を願ふなり、出かけて御診察願ふなり、お前さんの心任せにするが宜ござんす。」

「有難うございます、それでは寸時失禮致します。」

と安心して室を去つた。そうして直に猿田醫學士の宅へ電話をかけて、都合を問合  
せた上、やがて俥に乗つて出て往つた。

かくて一時間ばかり経た頃帰宅して、再びお角の部屋を訪ふた。

「唯今歸りましてございます、大變遅くなつて相済みませんでした。」  
淑かに挨拶した。

「何と仰やつて？ 彌張脚氣だと仰やつたでせうね。」

「はい、母様の仰やつた通り、痲痺性の脚氣ださうですけど、それも性質が良  
ないから、十分に療養しないと衝心する恐れがあると仰やるんですよ、とんだ病  
氣に罹りまして、困つて了ひましたわ。」

當惑さうに告げた。

「まあ、それはお氣の毒だね、これまで脚氣を患つた事がありました？」

「女學校に通ふ頃、一度脚氣の氣味がございましたけれど、その時は水氣が在つた

ものですから、素人にも直と分りましたので、父や弟と一緒に箱根へ避暑に參  
りましたから、いつとなく全快致しまして、その後は今日まで脚氣なぞ無かつた  
のですけれど、何うして恚ういふ病氣に罹つたのですか、眞箇窮つて了ひまし  
た……」

「それでは、脚氣の發る性質だと見えますね……だけれど衝心なぞすると大變だか  
ら、早く養生致なければならぬが、引受けて治して遣ると仰やつたかね。」

「脚氣療法は、お米の御飯を全然廢しまして、轉地するのが最上の療法だから、早  
速この二つを實行せよと仰やいましたでございます。」

「然う〜脚氣にはお米が大敵だと言ひますね、日本人はお米の御飯が頂かれなく  
ては、眞箇困りますが、しかし病氣故なら是非に及ばないから、先生が實行せよ  
と仰やれば、早速實行して治す外ないぢやありませんか。」

「御飯は食麩でも代用すれば、さほど困難は感じませんけれど、轉地致なければ容

「易に全快致さないと仰るんですが、それに困りましてございます。』  
 「困る事無いぢやありませんか、轉地致なければ全快致ないと仰しやるなら、早速何方へでも轉地して、十分養生するが宜いでせう、別荘も明いてる事だしするから……」

意外、意外、別荘行を言ひ出したら、飽くまで許さなればかりでなく、それを種に苛めやうと決心してゐたお角が、却て別荘行を徳通するに至つたのは、如何なる心機の一轉であらう、風か雨か、量り難いのはお角の胸の中である、深雪は欣々と、  
 「それでは暫時轉地さして頂きたう存じますか、お差支ないでございませうか。』  
 お角は例のやうな毒々しい様子もなく、寧ろ辭優しく、

「差支があつても無くても、他の事と異つて、病氣だから止を得ないぢやありませんか、猿田先生は何方へ轉地した方が宜いと仰やつたか知らないけれど、東海道方面で差支ないのなら、沼津か鎌倉か、逗子へでも往つては何うです、宅の別荘

も二ヶ所とも空いてるし、沼津が宜ければ、徳田さんの別荘へ願ひすれば、多分拜借が出来ると思ふから……」

「猿田先生は、何方とも御指定はなさいませんでしたでしたが、私の方から相州邊へ参りましては如何でございませうとお問ね申しましたら、東京附近さへ離れるなら、相州だつて、房州だつて、少しも差支ないと仰やいましたから、お差支がございませんければ、鎌倉の別荘へ遣つて頂きたいと存じますが、如何でございませうね……」

「鎌倉が宜しければ鎌倉、逗子が宜しければ逗子、何方とも空いてる事だから、お前さんの往きたい方へ往くが宜ござんすが、鎌倉の方が賑かだ宜いでせうね。』  
 「淋しくつても厭ひませんけれど、逗子は何彼に不便ですから、差支がなければ鎌倉へ遣つて頂きたう存じます。』

「それでは鎌倉と極めて往らッしやい、電話で然う言つて遣れば、何彼の準備を整

へて待受けるでせうからね。』

『有難う存じます、鎌倉には以前の別荘番が居るでございませうね。』

『然うですよ、久六夫婦がゐますから不自由は無いかれども、何なら女中を連れて往つても宜ござんすよ。』

『何う致しまして、小兒のお守さへすれば、外に用事は無いんですから、私一人で結構でございます。』

『それでも、避暑や避寒と違つて、病氣の養生に往くのだから、誰か看護婦代りに連れるが宜いぢやありませんか。』

底氣味悪く親切に勧める。けれども深雪は、曾て人手が足りないといふ口實の下に乳母のお光を、女中代りに使用すると言ひ出したお角の事であるから、設合眞實の親切から勧めて下れるとしても、義理にも辭退しなければならぬ場合に立到つて居るから、甘んじて辭に従ふ事は良心が許さなかつた。

『人手の少ない中を、何うして連れて参られませう、大した病氣と申すものではございませぬ、轉地して静養さへすれば、必ず全快すると仰やるんですから、御親切は有難うございませうけれど、別荘番もゐる事ですから、小兒を連れて私一人で参る事に致します。』

『それではお前さんの氣隨にした方が宜いでせう、一人の方が氣樂は氣樂だからね』  
『然う致しますと、今日に準備を整へまして、明後日参りたいと存じますか、お宜しうございませうか。』

『宜ござんすとも、何時なりと往らッしやいよ。』

『有難う存じます、それでは然ういふ事に極めさして頂きます。』

『永く逗留のやうだと、私も見舞に往きますから、その節又必要があれば上げるから、取敢ず當分のお小遣錢上げるから、買つて往きたい物は買ふが宜いでせう。』  
と紙幣で三十圓渡した。昨日までの姑とも思はれぬ親切に、深雪は如何なる仔細か



と、怪訝に感じつゝ、

『どうも有難う存じます、それでは頂戴して参ります。』

と押戴いて受取つた後、やがてお角の部屋を去つた、お角は冷かに見送つて、

『すつかり思ふ坪に欲つたね、これで一安心だが、これから後が旨く行けば宜いけれども、何しろ大芝居だからね……左に右山浦へ知らすだけは知らして置く事に致やう。』

と書面を認めるのであつた。

### 一九 歡喜

深雪は己が部屋へ入るが否や、打つて變つたお角の態度に就いて、不審を起さずには居られなかつた。先づ文子に牛乳を與へ置いて、茫然と考へ始めた。

『昨日まで鬼のやうな苛め様をした方が掌を翻へすやうな、今日の状態は何うした

理であらう？何か感ずるところがあつて、心機一轉なすつたのか知ら……元々苛められるやうな怨みを買つた事無いんだから、静にお考へになれば、罪な事をしたといふ、良心上の苛責が起らなければならぬ筈だけれど、然ういふ良心上の悔悟から、打つて變つて佛のやうな、優しい精神にお成りなすつたのか知ら……若し果して然ういふお心に一變なすつたとすれば、好んで作病なぞ構へて、別荘なぞへ往かなくとも、一家平和にゐた方が、甚だに樂みだが知れないけれど、解らないお心だわね……しかし許されないかと思つた轉地療養が、思ひがけなく容易く許されて、左に右安心したわ、設令母様の心機が一轉致たにしろ、許されたのを幸ひ、暫時別荘へ往つて延々と保養する事にしやう、餘り心配が續いたので胸に大きな塊が出来たやうだわ……三週間も往つてる中には、漸次幽吉さんの歸朝も近く、母様の心中も、色彩が鮮明に分る、苛責に衰弱した、軀の健康状態も恢復する、何彼につけて好都合だからね。』

一縷の光明を認めた心地を覺えて、何時になく快感が湧いた。ところへ突然夏子が姿を顯はして、

「姉様唯今……」

と挨拶した。寔に彼女は女學校から歸つて來たのである。深雪は和と笑つて、

「もう退校時刻ですかね、私夢中で居るものだから、時刻が分らないわ。」

「何うして夢中なの？」

「例の一件が旨く行つてよ。」

と囁くやうに告げた。夏子は袴を着けたまゝ、深雪の傍近く進み寄つて、

「例の一件とは、別莊行の事なの？」

と小さい聲で問ねた。

「は、然うなのよ。」

「先生の方も、母様の方も、何方も旨く行つたの？」

と眼を睜つて聞いた。爲に深雪は猿田醫學士を訪ふて、事情を打明けて、その承諾を得た事、并にお角へ病状を語つて、轉地療養の必要を告げた事、お角が例になく物優しく、轉地療養を許したのみならず、自分の費用として、三十圓の金子を與へた事など、囁くやうに詳しく物語つた。

「それも唯た今の先の事だから、私何うした御量見か知らと、心中を計りかねて、獨り左思右考へて居たところですよ、一体何ういふ理由でせうね。」

夏子の斷案を聞くべく問ひかけた。

「へえ……それは眞箇意外だわ、私の考へでは、猿田先生は兄様と友人の事でもあ  
るし、理否の能く分つた方だから、事情を打明けてお願ひすれば、屹度承知して  
下さると思つたけれど、彼人が別莊行を拒むに相違無いと、そればかり心配して  
わたのに、能く苦障も言はずに承知なすつたわね、ですけれど、例に比較して物  
優しかつたと言ふだけで、餘り快い顔色ではなかつたでせう……」

「ところが始終笑顔をなすつて、少しも嫌な顔なさらなはいばかりでなく、別荘へは御自分からお勧めなすつてよ。」

「まあ變な人ね。」

「その上に、看護婦代りに、女中まで連れて往けと仰やつたけれど、それは斷然お斷り致しましたわ。」

「猫の眼のやうな方ね、ツイ二三日以前まで、鬼のやうな苛め方なすつた癖に……しかし姉様、どんな精神だか分らないから、それ位な事で油斷はならない事よ。」

「油斷はならないけれど、元々怨みを受けるやうな覺無いんですから、何かの動機で御機嫌が直つたのぢやないか知らと、善意に解釋してゐたのですわ、私はそれを祈つてゐるんですからね。」

「彼の意地悪根性を改めて、善良な母親に成つて下されば、前身は左に右、今日で

は名義上の母親に相違無いんですから、平和に暮したいのは、お互の願ひですけれど、教育のある方なら、一時悪感情を持つてゐても、悪かつたといふ良心の苛責に逢へば、直に悔悟しますが、元來無教育の上に、賤しい稼業に沈んで、何事にも猜疑心と、偏狹とを持つて、育てられて來た方ですから、何うかすると、御機嫌の好い事もあるけれど、直に又地悪くなさるんだから、少しも安心出來ないわ、窃盜の悪名まで被せやうとした方が、二日や三日の中に、那樣善良な人に成れやう道理ないぢやありませんか。」

「眞箇だわね、然う考へると、打つて變つての親切は、底氣味の悪い心もするわ。」

「ですから、轉地療養を快く承知なすつたからと言つて、本來なら當然の事なんだから、それで鬼のやうな精神が一變したとは言へないから、これまで通警戒した方が宜いことよ。」

「油斷大敵ですからね、その心算で警戒致しますわ、これまで通り苛められるものだ

と覺悟して居れば宜いんですからね。」

「しかしまあ、目的の別荘行が目く行つて何よりだわ、傍にさへ居なければ、苛められる氣遣もなければ、嫌な顔見る心配もないんですからね、私姉様の爲にこんな結構な事ないと思ふわ……」

「これも貴女が勧めて下さつたからこそ、好都合に行つたのよ、兄様が歸つて入来しやれば、何も彼もお話して、屹度お禮をしますわ。」

「どうか山ほどお禮を頂戴ね。」  
と微笑しつゝ、

「それは然うと、鎌倉へは何時往らッしやるの？」

「明後日往く意なんですよ、土曜をかけて遊びに入来しやいな。」

「は、屹度往くわ、この後暫時は私一人苛められなきやならないんですもの、日曜毎に必ず往くわ、家に居たつてつまらないんですからね。」

「御馳走を作らへて待つてますわ。」

と打解けた調子で言つた。すると夏子は思ひ出したやう、

「然う、私先刻途中で、胖さんに會ひましてよ。」

「まあ、何處でお會ひになつて？」

「網代町の角を曲りかけると、不斗顔見合せたら、それが胖さんだつたものですか、俵を留めさして、暫時お話ししましたが、展覽會へお出しになる屏風とかを、描いて居らッしやるので、學校から歸ると、夜の十二時まで彩管を持通しだと言つて居らッしやつてよ。」

「日外そんな事を書いて書面を寄來して居ましたが、それでは彌張描いてゐると見えませぬ、まだ修業中ですから展覽會へ出したところが、到底物にはならないでせうけれど、自分では立派な美術家になつて、東家を再興する決心であるものですから、一生懸命なんですよ。」

「だって十五の歳に一等賞をお取りなすつた程ですもの、這度も又屹度優賞をお貰ひなさるわ、私蔭ながら成功を祈つてゐてよ。」  
「私も彼人一人が便ですから、どうか早く世に出るやうにと、蔭ながら祈つて居ますけれど、何を言つてもまだ十七ですからね、せめて二十歳にならないと徒目ですわ。」

「ですけれども、秀才で居らつしやる上に、体格が良くて居らつしやるから、二十歳位に見えてよ、私随分年齢相應よりは大きいと言はれてゐるけれど、胖さんの傍へ行けば、辛と肩までより無いんですもの、確に二十歳位の價値あつてよ。」  
「体格は五尺四寸からあるさうですから、父よりも高く成るでせうけれど、形ばかり大きくても、まだ何彼が伴ひませんからね。」  
「何うして確乎して居らつしやるわ、新藏さんなど爪の垢でも頂いて服むと少しは精巧に成れるであらうと、私眞箇敬服してゐますわ、今に大美術家にお成りなさ

るから、どんなに樂みだか知れないわ。」  
と夏子が熱心に賞揚した。  
「中學の成績も、繪畫の方の成績も、成績は悪くないんですけれど、世に出るまでには前途遠遠ですからね、眞箇一日千秋の想ひで待つてますわ。」  
「御自分でも、早く世に出やう出やうと、その覺悟で修學して居らつしやるから、意外に早く成功なさると思ふわ。」  
「貴女でも胖でも、普通の人と比較すれば、非常に早熟の方ですから、或は意外に早く世に出られるかも知れませんけれど、東家を再興するまでには、容易な事ぢやありませんからね、ひよつと何か傳言をお願ひは致なかつたでせうか。」  
「別段お傳言はなさらなかつたけれど、然ういふ理由で晝夜忙殺されてゐるから、十月の初までは何事も失禮するけれど、悪からず許して下さるやうにと、それだけ仰しやつたわ。」

「然うですか、それは有難う、勉強さへして居れば、別段用事ないんですから、音信しなくとも安心して居ますわ。」

「こんな事お知らせすると、姉様御心配なさるか知らないけれど、餘程過度に勉強なさると見えて、彼の美しい豊かな輪廓のお顔が、少しお瘦なすつてよ、御病氣でもなさると大變ですから、精力を恢復するだけの滋養分をお採りになるやうに忠告してお上げなさいましよ、中學へ通ひながら大作をなさるんのですもの、衰弱なさるも無理ないと思ふわ。」

「まあ那樣に眼に付くほど瘦ましたかね、何事に依らず熱注する方ですから、屹度夢中になつて描いてゐるんですよ、彼人に病氣でもされると、眞箇取返しが付きませんから無理な精力を出さないやうに、早速注意して遣りますわ。」

「それは然うと姉様、お小遣に御不自由は無いでせうけれど、三十圓ばかりのお金は直に失くなつて了ひますから、お金子が必要なら、私を持って往らッしや

いよ、私母の紀念に貰つた、誰も知らないお金子持ってますから、何時でも差上げてよ。」  
と親切に言つた。

「有難う、私一人ですから、一ヶ月位何うにか遣つて行けるでせうし、足りなければ、母様が何時でも遣ると仰やつたから、左に右頂ただけて遣つて見ますわ、若し母様も下さらず、不自由を感じる節は、お願ひするか知れませんが、その際は宜しくお願ひ致しますわ。」

「三十圓で足りなければ、何程でも上げると母様が仰やつて？破天荒だわね、眞箇何うしたといふのでせう、何だか薄氣味が悪いわね、御馳走食べて油断するなど言ふ譬がありますから、旨い口に乗ると、甚麽逆襲を受けるか知れないから、必ず油断は出来ない事よ。」

「何事にも注意して、お小言を受けないやうに心懸けますわ、畢竟私が行届かな

いから、お叱りを受けるんですからね。」  
「姉様のやうな温良な方を苛めるのは、苛める方が無理よ……しかし兄様が御歸朝なさるまでの辛抱だから、我慢なさいね。」

### 二〇 無名の書面

さてもその後、東胖は深雪の書面に感奮した結果、師たる雪山の許諾を得て、文部省主催の繪畫展覽會へ出品すべく、江上の詩聖と題する繪畫の揮毫を始めたが、元來天稟の書才を有する上に、東家の再興を専念として、一日も早く世に立つべく非常な熱心をもつて研究した爲に、往々師の雪山をして、感嘆せしむる技能を示すやうに成つたから、手腕を試す絶好の機會であると思惟して、胖の請ふまゝに揮毫を許したのであるから、胖の自由意思に任せて、初めから放任して少しも干渉しなかつた。爲に胖は責任の重大を自覺すると共に、非常なる發奮と決心とを以て、こ

れが揮毫を始めたのであつた。しかも中學へは、一日も怠らず通學して、學校の餘暇をもつて努力して居つた。

時は九月の下旬で、出品期限まで僅旬日を餘すのみであつたが、しかし繪畫は既に七分方出来上つてゐた。今日も胖は例の如く學校へ往つて、まだ歸つて來なかつた。

雪山は、二階の書部屋を胖に貸與へて、自分は離房の一室に閉籠つて、同じく文展への出品畫を揮毫して居つた爲に、未だ一度も胖の作畫を觀なかつたが、自分の展覽會の出品畫としては、寧ろ小品に屬する二尺絹本に過なかつた爲に、豫定の時日よりも早く出来上つたので、胖の不在中ではあつたが、二階の書房へ上つて、描半の作品を眺めるのであつた、半白の疎髯を撫でながら、やゝ半時ばかり身動きもせず、凝乎と眺めて居つたが、

「彼は眞に天稟だ、藍より出で、藍よりも青いと彼の如きを言ふのであらう、構

圖は固より描法と言ひ、人物の活動と言ひ、悉く神韻を帯びて、優に畫聖の堂に入つて居る。恐らく出品畫中の白眉であらう、實に恐るべき手腕である。如何に天稟とは言ひながら、僅か十七歳の青年でありながら、かゝる技能を有して居るといふは、古への畫聖にも類例のない事で、空前の第一人であらう、今日これほどの手腕がある上は、東家の再興は勿論の事、博士に優る名聲を博する大美術家に成れるであらう、門下生にかゝる天才の出来たといふは、我ながら誇りとするに足る理だ、實に前途有望な青年だね……」

感嘆して、やがて己が部屋へ入つた。そして自分の出品畫に對つて、瞳を凝らして瞶めて居つたが、

「東のやうな出品畫があるとすれば、あの畫に譲らないだけの大作を出すのであつたに残念な事をした、小品の故かも知れないが、威壓されて見劣りがするやうな感がある……事に依ると、美術奨勵會が特別賞として委托した、一千圓の賞金

も、彼の手に落つるかも知れないな。」

折柄胖が歸つて来て、

「唯今歸りました。」

と恭しく挨拶して去つた。雪山はその後姿を樂げに見送つたが、昨日までの胖とは何うしても思へなくて、俄に一人前の畫家になつた感じがした。

己が部屋に入つた胖は、手早く制服を和服に着換へて、滲み出た汗を拭きつゝ、急いで二階の畫部屋へ上つた。そうして先づ、描きかけの八曲屏風に對して、やゝ寸時瞳を凝すのであつた。蓋し色彩の調和などを、仔細に考究するのであらう。ところへ女中が上つて来て、

「東さん、郵便が來ましてよ。」

と二通の書面を投るやうに渡して去つた、胖は手に取上げて眺めて居つたが、一通は姉の深雪が寄來したのだと知れたが、今一通は春行夏來と記してあるけれども、



かゝる姓名の人を知らないのみならず、その手蹟にも見覚えがないので、

「春行夏來……妙な名だね、這麼人遭つた事もなければ、聽いた事もないが、何うして書面なぞ寄來したのか知ら……」

胖は開封もせず、疑問の書面を寸時眺めてゐたが、やがて消印を檢めた。

「麻布の消印だが、何しろ住所が記してないから見當が付かないね。」

言ひつゝ下に置いて、深雪の書面を開封して黙讀するのであつた。

「この書面で見ると、暫時文字を連れて鎌倉の別荘へ往くとしてあるが、這麼涼しくなつてから避暑でもあるまいが、何をしに往くのか知ら……詳しい事情が記してないから、更り理由が分らないね。」

と卷納めた。成程深雪の書面は鎌倉行を通知したのみの簡短なものであつた。胖は再び疑問の書面を手にして、熟と考へて居つたが、

「僕へ宛て來たものに相違ないから、左に右披いて見やう……」

と遂に封を披らいて讀み始めた。

突然ながら書面を以て申上候、承はり候らへば、貴下には目下今秋開設の文部省展覧會へ御出品の目的にて、御大作御揮毫中の由御奮發の段双手を擧て奉賀上候、私事は故あつて變名相用ひ候へども、曾て貴下が東洋畫會へ御出品の御揮毫を拜見し、密に將來を期待致居候ところ、其後貴下には、何れの展覧會へも御出品これなく、轉た失望罷在候折柄、這回久々に御大作御出品と聞き、今より開設の日を鶴首相待居候、就いては甚だ失禮千萬に候へども、御菓子料として、金十圓郵便小爲替にて進上仕り候に付、御嗜好の品御取寄せ被下候て、御精力御養ひ被下候へば、何よりの本懐に御座候。何れ拜眉の機會これあるべくと存じ候間、其節本名相告げ可申候。時下折角美術界のため御大切に遊ばされ度願上げ候早々。

無名生

東 胖 様

讀終つた胖は封入してあつた郵便爲替を一見した後、

「して見ると、僕が東洋書會へ出品した頃から、將來の發展に就いて注目してゐた人だと見えるが、誰か知ら……全然知らない人なら、氏名を變へたり匿したりする必要はないと思ふが、それとも世に知られた人か知ら……書面だけなら左に右金子を送られたには困つたね、住所が知れないから返す事はならないし、何う處分すれば宜いか知ら……差當つて必要ないから、必要な場合には借りて使ふとして、先づこのまゝ預つて置く事にしよう……金子の處分はそれで宜いとして、不思議なのはこの書面の差出人だ、僕が文展への出品書を描きつゝある事を誰から聞いたのだらう、先生の外同僚にも話た覺ないんだがね、事に依ると先生と親い方で、先生から聞いたのかも知れない……何にしても恚ういふ後援家が顯れた以上、この人へ對しても、入賞は出來ないまでも、入撰だけは是非致なければ、好

意に酬ゆる事が出來ない。」

非常に發奮した顔色を示した。と同時に思ひ出したやうに、再び書面を讀めたが、忽ち二通の書面を卷納めて、彩管を手にとつた。そうして寸時は、殆ど何事をも忘れたやう、頻りに彩管を動かして居つたが、やがて又筆を投げて凝乎と書面に瞳を凝らした。

「……今日の僕にはこれ以上の手腕は無いのだから、良否共にこれを以て満足致なければならぬが、撰に入る事が出來るか知ら……例年と違つて、本年は美術奨勵會の贈與した一千圓の特別賞與があるから、東京派は勿論であるが、京都派も一層努力するに違ないから、衆目を驚かすに足る作品が澤山出品されるに極つて居るが、その中に立入つて、どうにか見られる繪が出來るか知ら……僕は入撰して他に知られさへすれば、それで満足であるけれども、入撰する事が出來なければ、先生へも申譯がなし、第一世に出られないから、これが何より心配だ。」と

案じながら又筆を執るのであつた。

## 一一一 蛇 蝎

深雪が文子を連れて、在鎌倉扇ヶ谷の保科家の別荘へ来てから、早くも一週目を経過した。彼女はこの別荘へ来てから、苛酷の姑の壓迫を受けないのみならず、氣候の好い、閑静な別荘の中で、愛兒を相手に、讀書にのみ親しんで居る爲めに、籠から放された小禽のやう、神身ともにのびのびとして、蘇生した如く感ずるのであつた。

某日の黄昏であつた。残る暑さの烈しくて、堪へ難きまでの暑さに憫まされたので涼を浴びるためと、少しばかりの買物を兼ね、文子を別荘番の妻に托して置いて、程遠からの鎌倉の街へ出た。華美な縞御召の上に、樺色がかつた金春織の丸帯を締め、髪は大正結の束髪に、指に輝るは寶石の指環であつた。三四種の買物を調べて

キルク草履の歩も静に、元來し道を、別荘へと歸りかけたが、夕風の涼しく肌を拂ふのに、得も言はれぬ爽快を覚え、蟲の鳴音を聴きつゝ暮れ行く遠近を打眺めて歩んで居た。

「吁々快い氣持だね、これで幽吉さんと二人ならまだ楽しいであらうにね……任意になるものなら、一生這麼氣樂に暮したいわ。」

と憧憬するがやう途上に立留つて、遙の西空に湧き出でた雲の峰を見遣つた。先の程から深雪の跡を、見えつ隠れつ、密に尾行する男があつたが、この時こっそりと近寄つて、

「深雪さんちやありませんか。」

と突然後から辭をかけた。この意外な呼聲に、深雪は吃驚して振返つたが、忽ち可厭な顔をして、

「まあ膝きました、こんな場所を名を呼ばれる人は無い筈ですから、誰人か知らと

思ひましてよ。』と眼を睜つた。

「然うでせうとも、豈夫私が此地に居やうとは思つて居らッしやらないからね、近頃は此方に來て居らッしやるんですか。』

「は、少し加減が悪いものですから、養生に參つてゐますのよ。』

「然うですか、それはとんだ事ですね、何處がお悪いのです。』

「脚氣が起りましたので、轉地療養に參つてゐるのです、貴方近頃此方に居らッしやるんですか。』

「何有然ういふ理ぢやないです、某華族さんが別莊が賣りたいから周旋を頼むと、言はれるものですから、その別莊を觀ながら暫時滞在して保養してゐるのです。』

「左様ですか、此方は東京と違ひまして、氣候が宜しうございますから、御保養には至極適してゐますわね。』

かく對話する中にも、深雪は可厭な人に見付けられたと、日外邂逅つた時の事など

思ひ出で、不安を感じずには居られなかつた。が、敬して遠ざけやうと、表面は故と物優しく辭を交してゐた。男は誰あらう、悪魔のやうな大村虎一で、絹セルの單衣に縞縞の羽織を被て、縮縮絞りの兵兒帯には、金鎖を巻附け、雪白のパナマ帽に白足袋の扮装で、一見紳士体を粧ふてゐた。

大村は絶えず深雪の舉動を眺めつゝ、

「それに、幸ひ買求めたいといふ客が附いたものですから、その人の來るのを待ながら、彼是で遊んでゐるんです。』

「左様で居らッしやいますか、それは何より結構ですね、どうも失禮致しました、随分御機嫌宜しく……」

と一禮して歸りかけた。

「深雪さん、もうお歸りですか。』  
追ひ絶るやうに言つた。

「止むを得ない買物に出かけましたが、もう暮かゝつても居りますし、小兒を預けて出かけましたから、これで失禮致します。」

辯解して又去りかけた。大村は慌て、

「でもありませんが、是非貴女と御相談したい事がありますから、暫時その邊を御一緒に散歩して頂きたいですね。」

底氣味悪く言ひ出した。

深雪は又かときよつとしたが、飽まで物優しう、

「まあ貴方は、私さへ見れば、呼留めて何の彼のお調戲なさるのね、又口外やうな事仰やると私迷惑致しますから、どうぞ御免なすつて下さい。」

と微笑みつゝ歩み出した。

「おやッ貴方は承かないで歸るのですか、歸るならお歸りなさい、だが深雪さん、私は貴女に何んでも彼でも相談致なきやならない事があるのですから、それでは

これから御一緒に御別荘へ伺ふ事に致ませう。」  
と同じやうに歩み出した。深雪は再び立留つて、

「大村さん貴方随分な事仰やるのね、私貴方から押掛強談受ける覺ありませんわ、女と侮つて、餘りな事仰やると却て貴方の御名譽に障りましてよ。」

先の態度と打つて變つた權幕で言つた。

「押掛強談とは何事です、誰が強談を致しました、他聞の悪い事仰やんな、相談致たい事があるからといふのを、貴女が順しくお聞きにならないから、それでは別荘へ御一緒に伺つて、緩々聽いて貰はうと言ふのです、それもです私の一身に繋る事のみちやありません、貴女の安危に關する、重大な事を耳にしたから、親切上から御参考のためにお知らせ致やうと思つたからです、嫌だと仰やれば強てとは言ひませんが、しかし深雪さん、貴方は近來、さる人から非常に苛酷な扱を受け居らッしやる筈だが、それは何が爲だといふ事を御存じですか。」

と意味ありげに言ひ出した。この意外な辭には、深雪も耳を傾けずには居られなかつた。と言ふのは、姑お角が己に對する態度が、俄に一變して、冷酷無情を極めるやうになつたに就ては何か深い原因がなければならぬが、その原因が何う考へて見ても知れないために、如何にもして捕捉致たいと、心を碎いて居つた折柄であつたからである。それゆゑ覺す釣り込まれて、

「それを貴方何うして御存じです。」

と眼を睜つて問ひかけた。大村は放した征矢の圖星に中つたのを、心密に冷笑ひつ

つ、  
「何うして知つたか、それはお話しする必要はありませんけれど、不斗した事から承知して居りますから、その事に就いてもお話致たり、又私の希望をも打明けて御相談したい事もあるものですから、それで御別荘へお供が致たいと言つたのです。しかし私のやうな者が別荘へ來ては、迷惑すると仰やるなら、強ひてお供は

致ませんが、深雪さん、私は今日もあの當時も、貴女に對する戀の熱度に變りはないから、念の爲に唯一言だけ忠告して置きますが、貴女の身には、恐るべき悪魔が付纏はつて、貴女を呪ひ、貴女を奈落の底に沈めやうと、戦慄すべき悪謀を企て、居るから、折角大切になさらないと、今日の榮華と幸福とは、到底永くは續かないですよ。」

と益意味有る辭を告げた。

「悪謀と言つて、甚麽事をするのでせう！」

と急ぎ込んで問ねた。大村は沈着拂つて、

「は、は、は、貴女はそれが聞きたいですか、お歸りを急いで居らっしゃるんですから、今日はお歸りなすつた方が宜いでせう……」

故と焦すやうに言つた。

「貴方随分お人が悪いわね、そんなに皮肉な事仰やなくても、話して下すつても

「宜いぢやありませんか。」  
 「無論話す意でお留したのでから、話すには話しますが、それを話すに就ては私も貴女から聞かなければならない事がありますから、私の希望を容れて下さるなら、何ういふ悪謀を運しつゝあるかといふ事を、詳しくお聞かせ致しますが、如何です、私の希望をお容れ下さる御精神があるでせうか。」  
 と答を促した。

深雪が大村と立断をして居る中に、黄昏の空は、漸次と夜の帷に包まれて四五間先は真箇見分が付かないまで暗くなつて了つた。深雪は愛兒文子を、別荘番の女房へ托して出たのであるから、小兒の事は氣に掛る、大村の所謂悪謀なるものは、どうかして知りたいと思ふ、心は二つ身は一つ、如何にしたものであらうかと、熟と案して居つた。大村はもどかしさうに、

「如何です、御決心が就かないと見えますね、貴女の事ですから、私の希望は容れ

たくないが、貴女に關する悪謀の一件は聞きたい位な事でせうけれど、物事は然う自分勝手にばかりは行かないものです、嫌だと仰やるなら、強ひてとは申しませんけれど、今も言ふ通り、やがて悲しむべき運命が來ますから、その覺悟でもなさるが宜いでせう。」

悪運命に陥るのを極つたやうに言ふ、恚う言はれると、深雪が眼にはお角の冷酷無情が、顯然と浮み出て、過し夜の失くなつた金子の事など聯想して、より以上の奸謀悪計が、今にも身に迫りつゝあるやうに思はれて、恐怖を感せずには居られなかつた。

「致しますとね、私貴方の御希望を承はつたり、私の身の上に關はる悪謀とやらも、是非聞かして頂きたいですが、今日は小兒を別荘に置いて出て參りましたしその上もう這麼にも暗くなりましたので、寛々伺つてゐられませんから、一兩日の中に今一度お目に懸りたいと思ひますが、まだ一兩日位は御滞在で居らッしや

いませうか。』

と弱くも悪謀を聞ききたさの一念から恚う挨拶した。大村は我事成れりとやう、心の歡びを色にも見せず、

『無論一兩日は此方に滞在してゐますから、それでは貴女の御都合の好い時に會見する事に致しませう。』

『何方でお目に懸りませう。』

『何方と言つて、別段疾しい話ではないのですから、人の知らない場所、密會などするよりは、寧ろ公然お目に懸つた方が、疑惑を招かなくて宜いと思ひますから、私の宿へ御足勞下さつても宜し、私が御別荘へお訪ねしても宜いですが、御足勞願ふも失禮ですから、私がお訪ねする事に致しませう。』

と事も無げに言つたけれども、深雪は別荘番の手前なり思惑なりを心配して、頓には答へなかつた。大村は重ねて、

『お訪ねするのは御迷惑なですか、他の者なら左に右、以前御厄介になつた學生がお訪ねしたからと言つて、少しも差支ないではありませんか、偶然此地でお目に懸つてお訪ねしたといふ事にすれば、何人に聞かれたからつて公明正大なものです。』

説明するやうに言つた。深雪も成程と思つたか、

『それでは、然ういふ事に致しませうかね、實は別荘番などに、變に思はれるのが嫌ですから、如何したものかと考へて居たのですよ、ですけれど、以前恚ういふ關係の方だと言へば、豈夫疑ひは致ないと存じますから、御足勞を願ふ事に致しませうね。』

『然う致しますと、何時お伺ひしませうか。』

『左様ですね……夜中は少し困る場合がございますから、明日か明後日、貴方の御都合の宜しい時、お越を願ふ事に致したいと思ひますが、如何でせう！』



「……然う致しますと、明日午後三時頃にお伺ひ致したいと思ひますが、お差支ないでせうか。」

「は、それではお待申して居りますわ。」

「それでは、今日は失禮致します。」

と別を告げた。

『どうも失禮を……』

と深雪も挨拶して、兩人は右と左へ別れて了つた。天地は全く暗く暗く化して叢の中から虫の啼音が哀れに聞えた。

### 三三 龍口寺

片瀬の龍口寺と言へば、妙宗の巨刹として、將た又傑僧日蓮の法跡として、信仰者の崇拜著しく、參詣の老若遠近より集ひ、法鼓の響は朝未明より夕に至るまで鳴

り渡つてゐる。前には海を隔て、江の島を望み、白沙青松の間、七里ヶ濱や、腰越を眺め、後方は山を負ふて左に鎌倉を控へ、四時の眺望頗る風致に富むをもつて、湘南の地に遊ぶの人は、必ずこの靈場に杖を曳くほどで、その賑しさは想像の外である。

時は午前十時過、やがて半に成らうといふ時であつた。茶羽二重の羽織に同じ袷を着て紋織の角帯を締め、土耳古式の帽子を被つて、手にステツキと便利袋を携へ、雪駄穿といふ姿で、右手の山腹に精巧の建築を誇り顔に、巍然と聳えて居る五重塔の傍に腰打かけて、悠々と煙草を燻らしつゝ、四方の風光を眺めて居るのは、例の瀧澤雪山であつた。彼は文展出品畫の審査を開始する以前、毎年鎌倉の親戚へ遊びに来るのが慣例となつて居るので、今もその親戚へ滞在してゐて、天氣の快晴なのを幸ひ、この靈跡へと杖を曳いたのである。折柄此處へ来たのは、年頃五十二三かとも思はれる紳士で、黒のフロックに縞の洋袴を穿いて、嗜好みの變りチヨツキも

品好く、茶の山高帽子を被つて、手にはステッキを携へてゐた。雪山の傍に近づくが否、帽を脱して一禮した後、

「甚だ恐縮ですが、燐寸をお持ちでしたら、些と拜借致したいですが……」

「所持して居りますよ、さあ〜お使い下さい。」

と彼の便利袋からマッチを取出して貸與へた。

「これは有難う……」

と紳士は直に巻簾を出して静に火を移した後、押頂いて返した。そうして悠々と喫しながら、

「珍しい好い天気になりましたね。」

「左様誠に心地好く晴れまして、郊外の散歩には此上もない好い日になりました。」

東京から御入來に成りましたか。」

「はい、數日前から鎌倉に來て居りますが、今日は天気が好いのを幸ひ、片瀬から

江の島へかけて散歩しやうと思つて出かけました。貴方も東京で居らっしゃいますか。」

「はい、私も東京から鎌倉へ來て居るものですが、彌張この天気に誘ひ出されて、ぶら〜と此方へやつて参りました。」

「彌張お一人で！」

「はい一人で参りました。」

「左様ですか、それは却て御愉快でせう、しかし私は七八年以前参詣した限り、今日までこのお山へ登らなかつたのですが、五重の塔が新しく建立されたので、一層風致が整つたやうに感じますね。」

「それは私も同感です、萬縁の中に、匠の技巧と五彩の美とを盡した、この塔が聳えて居りますのは、宛らの繪模様で、京都にでも往つたやうな感じを起します。」

「東洋の美術の中でも、殊にこの五重塔は、精巧を極めた建築物で、外國人なぞも

嘆賞して居るやうですが、恚ういふ名刺には是非なくてはならない附屬物のやうに思はれますね。』

『左様ですとも、ですから全國を通じて、古寺名刺には、三重なり五重なりの塔が必ずあるやうに記憶して居ります。』

『成程然う承はれば名ある寺院には殆どあるやうですね。』

『この塔なぞも以前からあつたのですが、腐朽して了ひました爲に、數年以前漸く再建が竣成致たのですけれど、彌張新しいのが見た眼に華かですね。』

『寂びた趣こそ見られませんが、美しいといふ點になると、彌張新築に及ぶものはないですね、この以前参詣した時は、丁度新築しかけてゐた時でありました。』

雪山は紳士が突立つたまゝ話して居るのを氣の毒に感じたか、己が腰をかけて居た大木の切株を、半座分け與へて、

『お差支がなければ、私も江の島へお供しても宜しいですから、まあお掛けなさい

ませんか。』

『御同行下されば、何より幸ひです、それでは暫くお邪魔致しませう。』  
打解けた態度で同じ切株へ腰を掛けた。

『失禮ですが、貴方東京は何方で居らっしゃいます。』

紳士が問ねた。雪山は便利袋の中から一葉の名刺を取出して、

『片田舎同様の土地ですが、自然御通行の折もございましたら、お立寄りを願ひます。』

辭を添へて渡した。紳士は受取りつゝ己が名刺を取出して、

『私の宅も御同様片田舎ですが、是非お遊にお越し下さい。』  
挨拶して渡した。かくて雪山の名刺を眺めて居つた紳士は、やゝ愕き顔に、

『失禮ですが、瀧澤雪山と仰やるは、美術家で高名な、その瀧澤先生で居らっしゃいますか。』と問ひかけた。

「餘り高名でもありませんが、東洋書を専門に揮毫して居るその雪山であります。」  
微笑みつゝ答へた。

「左様ですか、あの瀧澤先生で居らっしゃいましたか、私も非常な繪畫の愛賞家でありまして、貴方の御高名は、豫て承知して居りますから、機會があれば、是非一度御高談が拜聴致したいと思つて居りましたが、計らずも今日拜顔を得たのはこの上もない本懐です、どうか今日を御縁の初として、將來御交情の程を願ひます。」

と挨拶した。雪山も名刺を眺めて居つたが、

「失禮ながら、國家と讀みますのですか、それとも國家と讀むのですか。」

「國家輝久でございます。」

「左様ですか、どうか御懇情を願ひます、三田豊岡町と言ひますと、拙宅とは餘り遠いと言ふ程ではありませんから、御閑暇の際は、御來遊下さい。」

「左様、僅六七丁位なものでせう、その中是非お邪魔に伺ひます。」

「失禮ながら、御職掌は……」

「數年以前までは、法官を奉職して居りましたが、目下は公證人として役場を開いて居ります。」

「左様ですか、それではなか／＼御多忙で居らっしゃいませうに、能く御旅行なさいましたね。」

「書記も居れば、事務員も居ります、それに法科大學に入つて居る伴が居りますので、一週間位の旅行は、時々試みるのです。」

「それは御安心です、どうも旅行は秋に限るやうに考へまして、年々この十月の初めに旅行する事に極めて居りますが、就中今日のやうな快晴な日は、何とも言へない愉快を感じます。」

「春の旅行を殊更に好む方があるやうですが、私は秋の旅行を愛する方でして、一

人で恠ういふ靈跡などを訪ふて千古の歴史を偲びながら、秋の淋し味を探る中に言ひ知れぬ快感を覚えるのです。」

「頗る御同感です、殊に私は日蓮上人の崇拜者の一人です、鎌倉に参りますと、必ず辻説法の靈跡を訪ふたり、龍の口の危難の跡を探つたり、行合川の古跡からこの龍口寺へ参詣するのを何よりの樂みにして居りますが、それも秋の凋落した淋し味と合致するので、一層感じが深いやうに思はれます。」

「眞箇旅行は秋に限ります。失禮ながら近々文部省主催の展覽畫會が開始される筈ですが、入選審査はこれからですか。」

「はい、明後日から始める筈になつて居ります。」

「致しますと、一兩日中に御歸京なさるんですね。」

「はい、明日か明後日早朝歸京致さうかと存じて居ります。」

「貴方も何か御出品畫が出来ましてございますか。」

「はい、私は第一回以來、年々参考品として出品する慣例になつて居りますので、本年も相變らず二點ばかり出品致します。」

「定めて入神の御名作と考へますから、開會の日を樂みに拜觀に出かけませう……」  
「いや、私の畫は至つて平凡の作で、舊來から有觸れた純日本畫に過ませんから、近頃の青年畫家が、種々の試みを工夫して、襖式の新味を出すのと比較すると、麻桿と金毛織の大禮服ほどの差がありますから、見られたものではございませぬよ。」

「その襖式の新味に就きましたは、私も至極御同感でありまして、あれでは徒に奇を衒ふばかりで、何れに日本畫の本領があるか、殆ど美術として見る事は出来ないです。就中審査員の中に、この襖式の繪を誇り顔に描いて、自己を吹聴すると同時に、後進に向つて、鼓吹する方があるやうに考へますが、何うかあゝいふ惡傾向は、全然撲滅して、純粹の日本畫をもつて進まれる事を希望したいです。」

成程寫生といふ點から見ますと、如何にも實物に近い繪が出来て居りますから、申分はないやうに思はれますけれど、實物に近い繪を描いて、それで眞骨頭を得たものと致しますると、寧ろ寫眞の方が趣味が深いかも知れませんが、しかし寫生を重んずるのは、その体を寫すのであつて、それを繪として表すのが、所謂美術でありますから、寫生の弊に捉へられて、設合ば一草を描くにしても、一莖一葉一瓣一蕊の微細を、實物同様に寫したからと言ひましても、それは單に草花を寫生したといふに過なくて、繪畫といふ上からは更に價値の無いものだと思ひます、失禮ながら雪舟、探幽、近くは應舉などの諸畫伯の畫が、後世の今日まで尊重されますのは、筆力と技術の巧なのは無論ですが、心血を傾倒されて居る爲に繪その物に生命が脈々として動いてゐるからです、その點に於て今日の美術家は日本畫家と言はず、西洋畫家と言はず、彫刻家にしても、鑄金家にしても、外觀の美といふ點にのみ技巧を弄して、心血を傾倒するなぞといふ、苦心を嘗めない

から、外觀は眼の眩むほど美しい物が出来るが、しかしそれは友仙模様と何等選ぶところはないので、美術としては三文の價値もないと思ひます。その中に立つて超然と純日本畫の進歩に努力し、貢獻して居られるのは、貴方お一人限ですから、蔭ながら感謝を表すると共に、御健在を祈つて居るのです、どうか邦畫のために益御盡力の程を美術界のため祈る次第です。』

「しかし、分け登る麓の途は異つてゐても、同じ高嶺の月を眺めやうとして居るの、研究として觀れば、鶴式の畫も結構、友仙模様も結構、如何なる試みも結構ですが、目的の月を取違へられると大變ですから、それを心配してゐるのです、物好きな連中になると、洋畫と日本畫とを或程度まで折衷して、新傾向を作り出さうなぞと、夢中になつて工夫を凝して居る方もありますが、何も那樣にしてまでも新し味を工夫せずとも、日本畫には日本畫としての生命と、特長があつて、二千年來傳承して今日に至つたのでありますから、その特長を完全無缺に研究致盡せ

ば宜いので、特更に根底から改造するには及ばないのです、私はこの主張から飽まで純日本書と終始する決心で、及ばずながら研究を続けて居るのです。』

「貴方の日本書に對する努力は、蔭ながら十分に承知して居ります。ところで青年書家中に、日本書を統一する天才は出ないでせうかね。」

雪山は相變らず煙草を煙らして、

「左様……日本書を統一するといふ事は、流派の關係上、少しく困難であらうと思ひますが、しかしです、今日のやうな混沌時代には、卓越した天才が顯れて、統一は出来ないまでも、その手腕の爲に、他を風靡するだけの、新時代を作り出すものですから、眞面目な研究に没頭して居る青年書家の中には、意外な天才が無いと限りませんが、萬一それが光輝を發揮する場合には、或は従來の邦書に一革新を促すかも知れないと思ひます。近時青年書家の形勢を観察しますのに、研究の精氣が磅礴して、將に何等かの形式となつて、爆發致やうとして居るのが

終